

主日礼拝説教「人が愛し合うために捨てるべきこと」予稿
日本基督教団石神井教会 2021年10月31日

【旧約聖書日課】創世記 4章1～10節

¹さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。²彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。³時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。⁴アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、⁵カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。⁶主はカインに言われた。

「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。⁷もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」

⁸カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。

⁹主はカインに言われた。

「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」

カインは答えた。

「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」

¹⁰主は言われた。

「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。」

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 3章9～18節

⁹神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にいつもあるからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。¹⁰神の子たちと悪魔の子たちの区別は明らかです。正しい生活をしない者は皆、神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も同様です。

¹¹なぜなら、互いに愛し合うこと、これがあなたがたの初めから聞いている教えだからです。¹²カインのようになってはなりません。彼は悪い者に属して、兄弟を殺しました。なぜ殺したのか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。¹³だから兄弟たち、世があなたがたを憎んでも、驚くことはありません。¹⁴わたしたちは、自分が死から命へと移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛することのない者は、死にとどまったままです。¹⁵兄弟を憎む者は皆、人殺しです。あなたがたの知っているとおり、すべて人殺しには永遠の命がとどまっていません。¹⁶イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。¹⁷世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。¹⁸子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。

【福音書日課】 マルコによる福音書 7章14～23節

¹⁴それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。¹⁵外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」†〈¹⁶聞く耳のある者は聞きなさい。〉¹⁷イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた。¹⁸イエスは言われた。「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分らないのか。¹⁹それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物清められる。」²⁰更に、次のように言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。²¹中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、²²姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、²³これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

「どうして怒るのか？」【こども説教のために】

今日の旧約聖書日課、「創世記」の「カインとアベル」は、「アダムとエバ」の二人の息子たち、兄弟同士です。その兄弟同士で殺人が起きたというのです。

兄のカインが、弟のアベルを殺してしまいました。カインにも言い分はあるのです。兄弟そろって主なる神に献げ物をしたのです。ところが、主はアベルの献げ物には目を留めてくださっているのに、カインの献げ物には目を留めてくださらなかった。少なくともカインには、そのように思えました。兄弟があれば誰でも経験することです。学校のクラスメイトとの間でも経験するかもしれません。親や先生が、他の誰かを依怙鼻息しているように見えるのです。自分のことが正當に評価されていないように思うのです。悔しくて、腹立たしくて、誰とも顔を合わせたくない。顔を見たら、思わず相手に襲い掛かってしまうかもしれない。

そんなときに、「どうして怒っているのか」と問われたりしたら、わたしたちは、「それは、あなたのせいだ」とか「あの人のせいだ」と、誰か他人に責任を転嫁して自分の怒りを正当化しようとするかもしれません。

けれども、主イエスは、そういう悪い思いは、わたしたち自身の心の中から出てくるのであって、外から入ってくるのではない、とお教えです。わたしたちの心は、実際には他の人の心や言葉に左右されることも多いのでしょうか。けれども、根源的には、「悪い思い」の原因は自分自身の中にある、人間とはそういう意味で「幼いときから悪いのだ」（創8:21）とおっしゃるのです。

自分の心の中の奥底に「悪い思い」が眠っていると認めることは、あまり愉快なことではありません。でも、それを認めて、自分自身の「悪い思い」と向き合ってこそ、その「悪い思い」に支配されないで、むしろ「悪い思い」を治めて、そのような「悪い思い」の自分を捨てることも、自分を捨てて人を愛することもできるようになる。主イエスは、そうお教えくださっているのです。

「カイン」のようなわたし

使徒書日課（ヨハネの手紙一 3 章）のヨハネは、「**神から生まれた人は皆、罪を犯しません**」と言います。「神から生まれた者」というのは、御子キリストのような人のことでしょうか。天使のような生まれの者ということでしょうか。本当に「神から生まれた」と思われるような人を、皆さんはご存じでしょうか。わたしは思い当たりません。

赤ん坊や幼い子どもの姿を見て「天使のようだ」と言うことがありますが、自分の手で子育てをしてみればすぐに、「本当は天使でもなんでもない」ことが分かります。一個の人として生きていく上で必要なものを、何の気遣いもせずに欲求として親や大人に向けるのです。その要求を満たすために泣くことを知っているのです。もちろん、その欲求や要求に応じてくれる親や大人がいるからこそ、そうするのは。赤ん坊や幼児の振る舞いを「悪」と言ったら違和感があるかもしれないませんが、人の欲望や要求と言うことで考えれば、赤ん坊や幼児と言えども、「神から生まれた天使」などと簡単に言うことはできないでしょう。

ヨハネは、もちろん、「生まれながらに、神から生まれた人」などどこにもいないことを知っているのです。もしかすると、「大酒飲みで大食漢」と人々から批判されたり、人々の振る舞いに憤りを示されたり、神殿境内で商売をしている人たちの台をひっくり返したりされたあの人、主イエスのことさえ、「生まれながらの神の子」だとは思えないと考えていたかもしれません。そうであっても、ヨハネは知っていました、あのイエスがご自分の命を捨ててまで人を愛された方だったことを。十字架にかけられたイエスを見上げながらローマ兵の百人隊長が「本当に、この人は神の子だった」（マルコ 15:39）と思わず言ったように、その十字架の死に至る生涯を見渡した弟子たちには、確かに主イエスは「神の子」とされた生涯を生きられた方であったのです。

この方に従い、この方の行かれた道を行くことが、「神の子として生きること」なのだ、主イエスの弟子たちは信じました。主イエスが宣教の歩みの初めに受けられた「洗礼」を、「神の子とされて生きる人生」の最初のしるしとして与えられたものとして、従う者たちに授けるようになりました。主イエスが洗礼を受けられたときに、天から「これはわたしの愛する子」との御声が響いたと教えられて、弟子たちの教会では、洗礼を授けられる一人ひとりに、「今あなたは、聖霊を受けて、神の子として新しく生まれる」と宣してきたのです。

ヨハネは、だからこそ、洗礼を受けた者たちの集まる教会が、何よりも主イエスのお教えくださった「互いに愛し合うこと」の実践の場であるべきだと、手紙を通して強調したのです。誰も仲間を殺したりはしていなかったでしょうが、「**カインのようになってはなりません**」と警告したのです。それは、わたしたちの人間関係が、本当に人を殺めることがなかったとしても、事実上関係を断ち、存在を殺してしまうようにまで至ることがあると、知っていたからなのでしょう。

「アベル」はどこにいる？

「カインのようになってはなりません」。そう論ずヨハネは、しかし、「アベルのようになりましょう」とは言っていない。「ヘブライ人への手紙」では、「アベル」の信仰が特別優れたものであったと評価されていますが（ヘブ 11 章）、ヨハネは「アベル」には関心がないかのようです。「創世記」の語り方も、「アベル」当人にはほとんど焦点を合わせようとしていません。物語の中での存在感は、まったく希薄で、「カイン」のように人物像を想像させる材料はどこにも見当たらないのです。どこか「空虚」な存在にさえ思えるのは、そもそも「アベル」という名が「空っぽ・空虚」という意味の語だからなのでしょう。

カインは、その「アベル」を殺したのです。殺した後、神に「**お前の弟アベルは、どこにいるのか**」と問い質されても、彼は「**知りません。わたしは弟の番人でしょうか**」と言うのです。もちろん、神なのですから、カインが白状しなくても、アベルが野で殺されて打ち捨てられていることはご存じだったでしょう。神がカインに問われたのは、カインにとってアベルがどのような存在であったかということを知らしめるためだったかもしれません。「アベル」は、カインにとって「空虚」な存在だったのです。殺しても構わない「空しい」存在だったのです。もちろん、カインはそのことを指摘されなくても、分かっていました。

むしろ神がカインに呼びかけられたのは、その「空しく空虚な」存在に過ぎなかった「アベル」を、カインの人生の中に取り戻させるためだったのではないのでしょうか。

わたしたちの人生の中で、かつて関りを持ちながら、今ではもはや存在しないかのように遠ざけられてしまった人は、少なくないのです。いいえ、身近な存在でさえ、わたしたちは、自分にとって利益になるかどうか、都合が良いかどうかということは無意識のうちに計算して、ある人には近づき、別の人とは距離を置き、ということをしているのでしょうか。目の前にいても、自分には関係ない人だと、どれほどの人から目を逸らしてきたことでしょうか。そのようなことを、家族・親族の中でさえ、してきたのではないのでしょうか。それどころか、わたしたちは信仰の家族であり兄弟姉妹である教会の交わりの中でさえ、いつの間にか、そのようなふるまいをしてきていたのではないのでしょうか。

けれども、わたしたちには、「アベル」の存在が必要です。真の意味での「アベル」が必要です。わたしたち自身の心の奥底に渦巻いている「悪い思い」を取り除き、捨て去り、空っぽの状態を作り出すためにも、わたしたちの内にも「アベル」を取り戻す必要があります。血を流して自らを明け渡した真の「アベル」、主イエス・キリストが必要なのです。

この方がわたしたちの心の内の「悪い思い」をも空しくさせてくださるとき、わたしたちは、自分を明け渡して「神の子」とされた者として、「空しい」存在であった兄弟姉妹たちをも愛する者とされるでしょう。